

2 人の出会い

「……はい、じゃあ今日はここまで。次回までに、興味のある地域の信仰や伝統行事についてレポート書いてきてね」

「ハア……レポートかあ。興味ねーよ、信仰とか」

90分の講義を終えるチャイムが鳴り、ほぼ満席に近い講義室から、ぶつくと文句を言う学生たちが部屋を出ていく。この授業は、民俗学の授業だ。学科的にメインの授業ではないのだが、出席してレポートさえ出せば単位が取れると言われるいわゆる“楽単”講義だった。故に履修登録している学生が多いのだ。その大半は、受講に対してやる気がない。授業中は隠れてスマホを触っている輩がほとんどだ。

そんな中、控えめな見た目の沢島^{さわしま}真咲^{まさき}は、その容姿に違わず座席の最前列で熱心に講義を聞いていた。正直特に何か目的がある訳ではなく、何となくで文学部を選んだ真咲だったが、比較的興味があったのがこういった土着信仰や特定の地域の歴史についてだった。なので、ほぼ趣味で受講しているようなものだ。

「うーん……どの信仰で纏めるかな……迷う……」

真咲の家庭は親族との交流が希薄で、季節ごとの行事も全くと言っていいほどやってこなかった。だからこそ、こういった古くからの土着信仰や伝統行事は非日常的なものに感じられ、もはやフィクションの世界を楽しんでいるような気分になるのだ。

真剣に、しかしどこか楽しそうに悩む真咲を遠くから見つめる男が1人。
如何にも一軍というような見た目をしている紅山^{あかやまとおる}透という男だ。何人かの
友達とつるんでいる彼は、一見すると“楽単”目的で受講しているような雰囲気
に見える。

「ふぁ……レポートだりい……。ま、レポート出しや単位確定だからな
〜。なあ、透。……透？ 早く行こうぜ」
「……ああ、そうだな……」

透は上背があり顔立ちも整っていてパツと目を引く存在だ。少し長めでウ
ェーブしているキャラメル色の髪がその色気を増幅させていた。

そんな透が最近専ら興味を持っているのが沢島真咲だった。真咲は透やそ
の周りの友人たちには居ないような大人しめな雰囲気、傍から見れば関わ
ることの無い人種に見える。しかし、友人たちに呼びかけられても視線を真
咲に合わせたまま動かさない。

「……いや、わりい。やっぱ先行っというて」
「?? おー、わかった」

透は呼びかける友人たちに断りを入れ、前列に座る真咲の方へ歩み寄って
声をかけた。

「突然ごめんね。こういうの興味あんの？ 信仰とか、行事とか」

「え？ あ、はい、まあ……」

透は、同じ学部ならその存在感からほとんどの人に認知されている。そんな透から急に声をかけられ、戸惑いを隠せない真咲。新興宗教の勧誘かと身構えるが……

「俺もさ、結構興味あるんだよね。レポート一緒にやんない？」

「え……、ま、まあ、良いけど……」

断る理由もないので、真咲はその申し出をあっさりと受け入れた。

「やった。俺の友達、みんな興味なくってさあ」

嬉しそうに微笑む透の顔は、普段友人たちと過ごしている時には見たことの無い表情だった。だるそうにしたり、笑ったりしながら話しているのを見たことがあるくらいだった真咲は、その穏やかな表情に思わず見惚れてしまう。

「俺、次も授業入ってるんだよね。何限が空いてる？」

「あ、えと、今日は……」

こんなふうに二人が出会ったのは、大学に入学して2ヶ月ほど経った頃の話だった。

レポートがきっかけで交流が始まった二人は、民俗学の話を通じて意気投合。とはいえ、一緒にレポートをする時間だけの仲だ。

いつものように2人で会話をしているとき、透が真咲にこんなことを問いかけたことがあった。

「沢島はさ、風習とか行事とか郷土芸能とか土着信仰とか……民俗学の中にも色々あるけど、どれに1番興味があるの？」

「うーん、そうだなあ……全部いいなーと思うけど、やっぱり土着信仰が一番フィクションっぽい感じで興味があるな。実際にはそんなことないんだろうけどさ。無宗教だと何かを崇めるってこと自体あまり身近じゃないから、どんな空気なのか気になるね」

「へえ……じゃあ、そういう信仰とかに抵抗はないんだ？」

「金むしり取られたり、命の危険に晒されたりするようなのはやだよ？ でもそうじゃないなら、何を信じて崇めるかは自由だと思うし。特定の地域の人が同じものを崇めてる光景って、あんまり見られない気がして」

「そう？ ライブとか行くとみんなが1人のアーティスト崇めてるところを見れるよ」

「いやそれだと“特定の地域の人が”ってところが抜けてるだろ？ やっぱその閉鎖的な感じがミステリー感というか、秘密な感じがしていいんじゃないか〜」

「あはは、そういうもん？ ……沢島のそういう考え、好きだな」

何気ない会話に頬杖を突きながら優しく微笑む透の顔に、何か新しい感情が芽生えるのを真咲は感じていた。

——そして、次の春。

きっかけになった民俗学の授業の単位は無事に取得出来たが、2年次ではそれに関連する授業は用意されていなかった。つまり、会う口実がなくなってしまったのだ。よく話すようになったとはいえ、学科は違っていたので受ける授業の大半が違う。このまま交流もなくなっていくのかと真咲が密かに肩を落としていた時、透から思わぬ申し出があった。

空き時間、いつも会うのに使っていた空き教室に呼び出された真咲。いつもと違う空気感を感じながら、できるだけいつも通りに透に対峙する。透は少し躊躇しながら、照れくさそうに言葉を紡いだ。

「沢島、あの……。……。俺と付き合って欲しい」

「え、っと……。付き合う、って、それは、つまり……。？」

二人で会ううちに芽生えていた密かな恋心。相手も相手だしいろいろな意味で叶うわけがないと思っていたのに、まさか透の方から告白されるとは思っておらず、半信半疑の真咲。

「恋人に、なってほしい」

「ほんとに俺でいいの……？」

「沢島がいい。ダメ……かな？」

請うような視線で問いかけてくる透。正直、断る理由が無かった。

「ダメなわけない。改めて……恋人としてよろしく」

「……！ 良かった……！」

こんな見目麗しい男を振るやつがいるとは思えないが、透は本当に心底不安そうな顔をしていた。真咲が告白を受け入れた瞬間、解放されたように息を吸い込み、真咲の手を握りしめた。

そこからすぐにお互いを名前で呼び合うようになった二人は、これまでの時間だけでは物足りなかったとでもいうようにプライベートな時間はほとんど一緒に過ごすようになっていった。

付き合う前はレポート作成を口実に空き時間に一緒に図書館や空き教室に籠るばかりだったが、交際してからは学外で会うことが増えた。毎度どこかの店に行くのは金銭的にきつい為、会うのはお互いのアパートの部屋。幸いお互い大学の近くに安いアパートを借りていたため、交互にお互いの家に遊びに行っていた。

家でサブスクの映画を見たり、一緒に料理を作ったり。ほぼ同棲のような

生活を送るふたりだが、意外にも肉体関係だけは持たずにいた。

真咲は元来性欲があまり強くない。しかし、恋人ができればそういったこともするだろうと覚悟はしていた。実際、透に告白されて付き合い始めた当初は、流石の真咲でもこれからキスとかその先のことも……と考えたこともあったが、現実にはキスすらもなし。一緒に過ごす時間は楽しいのだが、これでは友人の頃と何も変わらないではないかと思うことも間々あった。かといって、自分からリードするだけの経験と自信もなく、日々悶々とするばかりであった。

☆触れられないなら

そんな日々の最中。今日は休日だ。同じベッドで欲求の赴くまま睡眠を貪り、そして丁度気持ちよく意識が覚醒し始めたころ。ふと目を開けると、向かい合って横たわる透もこちらを見つめていた。その視線は、心なしかいつもより蕩けているように見える。

「透……」

「真咲……」

普段悶々としていた真咲は、このチャンスを逃すまいとそっと透の唇に指を這わせる。寝起きでまだ半分夢の中に居るような状態のせいかな、いつもより本能に忠実に身体が動いてしまっていた。

その唇に触れたい。その思考に支配された真咲は、透にそっと顔を近づけ……もう少しで唇が触れそうなほどの距離までお互い近づいたところで、透が煩惱を振り払うように首を振り、真咲の身体をそっと押し返した。

「ま、さき……、……っ、ごめん」

半分寝ぼけた頭でやったこととはいえ、抵抗されたことに少し傷ついてしまう。ついつい、これまでうっすらと思っていたことが口をついて出てきてしまった。

「……やっぱ、俺とそういうことするの、無理そう？」

「いや！ 違う、そうじゃなくて……！」

本当に誤解だと必死な表情で透が上体を起こす。

「じゃあ、なんで……」

「……正直、今すぐにでもそういうことはしたいと思ってる。ほら……」

そう言った透の股間は、言葉の通りズボンの上からでもわかるほど膨らんでいた。

「でも、ごめん……うちの地元のしきたりで、正式に結ばれるまでは性的な接触をしてはいけないことになってるんだ」

「そんなしきたりが……」

華やかな見た目に反してそういうしきたりを重んじているところも却って好感が持てる。触れてくれないことの理由を聞いたことと、自分で興奮してくれているという実際の身体の反応を見て、真咲は少し安堵していた。

「まあ……、しきたりならしょうがないか……」

もともと民俗学に興味もあったし、そういった慣習には理解を示すつもりでいた。しかし、透はそのしきたりをかいくぐる考えがあるらしい。

「つっても、正直俺もそろそろ我慢の限界なのは、わかる」

「え？ でも」

「触らなきゃいいんだよ」

そう言うとおもむろに透はズボンと下着を下ろし、張りつめたそこを露わにした。

「なあ、真咲……真咲が一人でしてるとこ、見せて……」

「透の……すごい……」

自分のモノより存在感のあるそれに真咲の視線が釘付けになる。

「真咲とエロいことするの考えてたら、すぐにこうなっちゃう」

「透……」

「二人で一緒に気持ちよくなろう？」

「うん……」

——— 続きは製品版でお楽しみください。 ———